

I. A. Ireland とは何者か

柴田 元幸

ボルヘスが友人ビオイ＝カサーレス、その妻シルビーナ・オカンポとの3人で作った幻想譚集 *Antología de la literatura fantástica* (1940) は、370 ページに 82 本の作品が収められ、編者3人の作品もそれぞれ1本ずつ入ったアンソロジーである¹。なかには10ページを超える「大作」もあるが（たとえばボルヘス自身の「トレーン、ウクバル、オルビス・テルティウス」）、大半は1～3ページの小品であり、もっとも短いのは、アメリカ人作家トマス・ベイリー・オールドリッチによる、1988年バイキング社刊の英語版のレイアウトではわずか2行の作品である。

A woman is sitting alone in a house. She knows she is alone in the whole world: every other living thing is dead. The doorbell rings.²

（一人の女性が、家のなかで独りじっとしている。彼女は自分が世界で独りぼっちであることを知っている。ほかの生物はすべて死んだのだ。玄関の呼び鈴が鳴る³。）

次に短いのは、ボルヘスがこよなく愛した、いわゆる「胡蝶の夢」で、バイキング版で3行。ジェームズ・ジョイスの“*What is a Ghost?*”も同じく3行だが、これは実のところ超大作『ユリシーズ』からの引用である。そして、『千夜一夜物語』の英訳で知られるサー・ロバート・バートンによる5行の物語があり、次いで“*Ending for a Ghost Story*”と題された6行から成る物語が続く――

“How eerie!” said the girl, advancing cautiously. “And what a heavy door!” She touched it as she spoke and it suddenly swung to with a click.

“Good Lord!” said the man, “I don’t believe there’s a handle inside. Why, you’ve locked us both in!”

“Not both of us. Only one of us,” said the girl, and before his eyes she passed straight through the door, and vanished.⁴

「なんて気味悪いんでしょう！」と娘は、そろそろと進みながら言った。「それになんて重い扉！」。そう言いながら彼女が触れると、扉はいきなり動いてかちっと閉まった。

「なんてこった！」と男は言った。「この扉、こっち側には把手がないぞ。僕たち、二人と

も閉じ込められてしまったよ！」

「二人ともじゃないわ。一人だけよ」と娘は言って、男の目の前で、扉をすうっと抜けていって、消えた。

この話、短い上に実によく出来ているので、高校生相手に翻訳入門のワークショップをやるときなどに愛用させてもらっている。しかもこの作品、ついでに「フェミニズムはどういうことを考えるのか」の実例としても使えるのもありがたい。この話の、男と女を入れ替えたらどれくらい違う話に思えるか？ それはなぜなのか？ 等々。

作者は I. A. Ireland とあり、ボルヘスたちのアンソロジーに付された解説によれば、1871 年スタッフォードシャー北部の町ハンリーに生まれた碩学の人で、シェークスピアが原稿を遺贈した人物を祖先として捏造したペテン師ウィリアム・H・アイルランド (1777-1835) の子孫だと称していた。著書には『悪夢小史』(*A Brief History of Nightmares*, 1899)、『スペイン文学』(*Spanish Literature*, 1911)、『新訳タキトゥス年代記第 10 巻』(*The Tenth Book of Annals of Tacitus, newly done into English*, 1911) がある。巻末の出典一覧を見ると、この「幽霊ばなしのためのエンディング」は *Visitations* (1919) から採った、とある。

こんな魅力的な奇譚を書く人の『悪夢小史』なんてぜひ読んでみたいと思い、まず OPAC で調べてみると、東大の図書館にはないし、日本中どの大学の図書館にもない。まあ仕方ない、よくあることだ。いつものとおり次は英語圏の古書店サイト ABE を見てみると、ここにもない。アマゾンにもやっぱりない……こうなると、とにかく存在することだけは確かめたくなくてきて、ハーバード、オックスフォード、大英図書館等々のウェブカタログにあたってみる……だがどこを見ても、*A Brief History of Nightmares* のみならず、*Visitations* も、その他どの「著書」も、そもそも I. A. Ireland なる著者名も、いっさいヒットしない。いったいどうなっているのか？

そもそも、ボルヘスたち以外の人々は、この人物についてどう語り、どういう作品を紹介しているだろうか。確認できたかぎりでは、I・A・アイルランド作品で現在活字で読めるのはこの「幽霊ばなしのためのエンディング」のみである。まず、子供のころからボルヘスを知っていたアルベルト・マンガウェル編の有名な怪奇小説アンソロジー *Black Water* に収められている⁵。ここでも著者紹介は似たり寄ったりで、著者がその子孫だと称したペテン師ウィリアム・H・アイルランドに関する記述は少し詳しい。作品は同じく *Visitations* (1919) から採った、とありながら、タイトルはなぜか“Ending for a Ghost Story”ではなく“Climax for a Ghost Story”になっている⁶。

そしてもう一冊、2001 年に刊行された幻想小説集 *The Treasury of the Fantastic* にも、やはり“Climax for a Ghost Story”の題で収録されており、この本には著者紹介はいっさいなし⁷。たぶんマンガウェルのアンソロジーから引っぱってきたのだろう（この本、なかなか

か低予算臭が漂っていて、20 世紀初頭までに作品を絞っているのも、内容上の必然性もさることながら、版權料を払わずに済ませるための方策なんだろうなあ、と勘ぐってしまう⁸⁾。

さらに、2008 年刊の *A Companion to the British and Irish Short Story* の、“The British and Irish Ghost Story and Tale of the Supernatural: 1880-1945”と題した章では、“I. A. Ireland is remembered primarily for *A Brief History of Nightmare* (1899)” (I・A・アイルランドは主として『悪夢小史』の著者として記憶されている) とはじまるアイルランド紹介が半ページ以上あって、これは！と思って色めき立って読み進めると、この作品の素っ気ない皮肉なトーンを、第一次世界大戦終了後も長くイギリスを覆っていた崩壊の意識と結びつけて論じたりしていて、それはそれで面白いのだが、“Climax for a Ghost Story”を全文引用したあとには“(Sandner 2001: 734)”と上述の *The Treasury of the Fantastic* の編者名が記されていて、要するに作品そのものは *The Treasury of the Fantastic* から引っばってきたようだし、『悪夢小史』の著者として記憶されている、と断じる根拠も示されていない⁹⁾。執筆者のプロフェッサー・ディビアシオ、いったい誰が I・A・アイルランドを、『悪夢小史』の著者として記憶しているのでしょうか？

要するに、I・A・アイルランドをめぐってであれ、“Ending for a Ghost Story”またの名を“Climax for a Ghost Story”をめぐってであれ、最初にボルヘスたちが提供した「情報」以上のものはどこにも記されていないようなのである。マングウェルは I・A・アイルランドの「祖先」についてそれなりに詳しく述べているが、これはすでに既知の史実であり、調べればすぐわかることである。

そう思って、*Oxford Dictionary of National Biography* 全 60 巻をはじめとする一連の人名事典にもあたってみたが、もはや当然ながらというべきだろう、I・A・アイルランドなる人物をめぐる記載はいっさい見あたらなかった。

もう言うまでもあるまい。*Antología de la literatura fantástica* には、編者三人の創作が、しかるべく名のった一本ずつ以外にも、実はあちこちに紛れ込ませてあるのではないか。ボルヘスたちの才をもってすれば、そのくらい朝飯前のことだったにちがいない。たとえば前述の、サー・ロバート・バートンによる 5 行の物語“The Tale and the Poet”も、なぜか巻末に出典が記されておらず、いかにも怪しいのである¹⁰⁾。

注

¹ 柳瀬尚紀訳『ボルヘス怪奇譚集』（晶文社）は本書の邦訳ではなく、収録作品が本書と相当重複するものの、より短い物語に絞った奇譚集 *Cuentos breves y extrordinarios* (1967) の英語版 *Extraordinary*

Tales (1971) の邦訳である。

² Thomas Bailey Aldrich, “A Woman Alone with Her Soul,” Jorge Luis Borges, Silvina Ocampo and A. Bioy Casares, eds., *The Book of Fantasy* (Viking, 1988; English edition of *Antología de la literatura fantástica*, 1940), p. 16.

³ 引用者訳。以下、訳はすべて引用者。

⁴ *The Book of Fantasy*, p. 137.

⁵ Alberto Manguel, ed., *Black Water: The Book of Fantastic Literature* (1983; New York: Clarkson N. Potter, 1984), p. 49.

⁶ ちなみに『ボルヘス怪奇譚集』の柳瀬訳の題は「あるファンタジーの結末」。

⁷ David Sandner and Jacob Weisman, eds., *The Treasury of the Fantastic: Romanticism to Early Twentieth Century Literature* (Berkeley, California: Frog, 2001).

⁸ 編者名なしの *Truly Scary Stories for Fearless Kids* (Toronto: Key Porter Books, 1998) も事情は同様と思われる。

⁹ Becky DiBiasio, “The British and Irish Ghost Story and Tale of the Supernatural: 1880-1945,” *A Companion to the British and Irish Story*, edited by Cheryl Alexander Malcolm and David Malcolm (Wiley-Blackwell, 2008).

¹⁰ ある現代作家は、これをボルヘスらの捏造、ここからより大きな物語を書くよう後世の作家をそそのかす挑発と見て、事実この奇譚を土台に普通の長さの短篇を書いている。Adam Mills, “The Artist in the Tower,” *Ideomancer*, Vol. 11, Issue 4 (December 2012): <http://www.ideomancer.com/?p=2253> (2012 年 12 月 18 日アクセス).